

仏教の現代化

—特に教化の問題について—

一

与えられた課題についてペンをとってみて、ハタとゆきづまったことは、『現代』という内容についてであった。

常に使いなれ、云いなれてはきたが、いざとなれば、今日の現代は明日の現代ではなく、明日の現代は過去になつてゆく。常に流転し変動しつづける時代性の中で、確かに、現代を内容的に規制することは、厳密にいつて不可能であり、またあり得ないことかもしれない。

かりに昭和時代を以て、現代という一区画にはめようと

梶 原 重 道

しても、戦前、戦中、戦後という大きな変動がありすぎるように、ここで考えようとすることは歴史的時代区分ではなく、ともかく現に今生きている時代という甚だ漠とした常識の他にはない。

これとても三才児から八十代の年令断層において考えようとする『現代化』にとって、焦点を合わすことは容易でない。特に教化という個の救済に直結すべき課題にとってはなおさらである。

そこで許されることは、現代がもつ時代としての社会性の傾向なり、特質なりを範疇として考えるということである。そして漠としてその時代の趨勢とか、風潮とか云われ

るものをもふくめてである。

二

本堂や、庫裡の建造物が、戦後寺院の復興とともに、鉄筋コンクリート化し、あるいは外陣を椅子式にし、書院を集会所式に改造したり、袈裟や衣を洋服の上に着用したりすることが、果して仏教の現代化のあらわれであろうか。

經典の訓読や、声明をピアノで伴奏できるように五線譜化したことが、同じように仏教の現代化なのであるか。

寺院建築や、儀式の現代化と、仏教教義それ自体の現代化とをいかに考え、その視点をどこにおくかということについては、さまざまな意見があろう。

特にこの場合の現代化とは、何であろうという問題は、恐らく時代とともに永遠の課題であるかもしれない。

ただ云えることは、仏教をいかにして現代に即応させ、理解させるかということについてである。

時代の趨勢というものは、たしかに一つの大きな流動である。これを取りきるには棹ささねばならない。この勢いや、流れに棹ささないかぎり、仏教はいかに法室であって

も、その底流に沈んでしまふであろう、また根なし草のように浮いてしまふにちがいない。

現代という、この流動の中に、仏教はいかに棹さすべきであるか、その潮流に浮沈され取り残されることなく、その流れとともにある仏教を考えるとということが、いわば仏教の現代化である。

寺院が往古のままに厳存し、その活動もまたそのままに伝承されてはいても、その時代人に即応しないとすれば、それはただ存在する形態であって、時代精神から遊離する。

この時代精神なり、社会心理とともに生きてゆく仏教を考えることが、云いかえればその現代化ということであろう。

高層ビル街の電車の軌道や、自動車のめまぐるしい往来の横を、色衣をまとい長袖をひきずって歩く棚経僧の姿を目撃したとき、異和感をもたないだろうか。時代が走るからといって、セドリックを自ら運転している法衣と半靴の姿が、時代とともにやむをえないものとして、適応しているであろうか。

国民の九割までが洋服を着ているという中で、色衣をまとって説法している姿が、なんらの奇異感もないと云いされるであらうか。鉄筋ビルや、文化住宅の並んでいる中で、寺院の結構美が、そのまま均整がとれているのであらうか。

仏教が誇る特殊建造物としての寺院を維持しながら、時代と調和させ、時代性との均衡を保ち、時代人の生活に直結した仏法が、時代精神の中に生きるために、仏教の現代化が常に要請されるであらう。

この点については、拙著「現代の教化」教育新潮社刊――
4、寺院活動の基準章を参照願えればありがたい。

三

現代化を考えるためには、何をさておいても現代化するものへの認識である。したがって現代の時代性とか、社会心理とかよばれる時代への、洞察から初めねばならないであらう。

つまり現代なるものの、これらに対する解明を、極めて冷静に、公平に、分析することを常に心がけねばならない

ということである。そして何が欠損し、何を要請し、何を充たすべきであるかを判定しなければならない。現代社会のそれらの欠損を補い、その要請に応え、それを充たすことへの方向こそが、仏教現代化の使命であり、意義である。

人間生活がその時代とかけ離れてはありえず、その時代の環境と不即不離の関連を保って生きているように、仏教もまたその生活を離れてはありえないからである。

排仏論におけるように、もし仏教が今なお、庶民の困窮をかえりみず、堂塔寺院の建築費を強要し、形骸的な宗教論に浮き身をやつし、派内の勢力争いを事とし、葬式年忌に事をよせて金銀施物をねだり、戒名に尊卑をつけて差別待遇をし、氣にくわなければ寺請書を出さなかったり、島原の乱後の江戸幕府のキリスト教弾圧政策に乗じて安眠し、いたずらにその惰眠をむさばり、特権濫用した過去寺院への批判に近いものがあるとすれば、現代における仏教の生命はもはや枯渇し尽していることを知らねばならないであらう。

かつて仏教文化交流協会が発表した調査によると、仏教が今日民衆の苦悩を救済しているか。という問に対して、

大いにしているというのが一四％、問題にならぬと答えたのが二七％である。

寺院は社会的に活動しているかという問に対して、大いにしているというのが僅かの九％、問題にならぬというのが三二％となっている。

現代仏教が必要と考えねばならぬことは何かに対して、壇信徒に奉仕せよが、一六％で最上位、住職はもっと教養を深めよが次位で一三％、この他經典の現代訳、社会的活動の教化、寺院様式の現代化、教義の平明化、教化活動の充実などと答えたものが一％から七％を占めている。その他寺院の統合であるとか、宗派の再編成といった積極策を主張したのが四％である。

これからの寺院はいかにあるべきかに対して、教化・教導というのが圧倒的で三四％、寺院の開放と社会的活動を訴えているのが一六％、僧侶の教養の向上と寺院活動に専念すべきであるというのも一六％、寺院様式、經典教義の現代化を指摘しているのが一二％である。

これらの回答率は十年も経過した今日、いかに変動しているかも一つの関心事ではあるが、それはそれとしてとも

かく、いま仏教の現代化を考える上において、極めて重要な指摘を得たように思うのである。

寺院という建造物と、その機能の問題、

住職としての使命と教養の問題、

教義とその教化伝道の問題、

以上の意識調査によって、おおむねこれらの問題についての真剣な検討が、自ら仏教の現代化につながるのではあるまいか。

現代と遊離することなく、その現代に生存する大衆に直結し、その要請に答えるためのほかにはない。

さらにこのことは日本仏教という既存教団に対する、いわゆる新興宗教の勃興とともに、現代というものの中で、仏教が大きく考えられねばならない問題でもある。

先年、私はインド、セイロンをはじめ、東南アジアを巡って、わが日本仏教に想いをいたし、この問題について強く考えさせられたのであった。それは新興教団に対比した日本仏教の反省でもあり、また現代の問題でもある。深奥にして広範な仏陀の教説が、自由に採択され、展開されて各宗各派を確立した日本の仏教は、それだけ円熟し、また

仏陀の教説を玩味したといえよう。

青色青光、白色白光の原理が、現実化されたのも日本仏教の各宗各派の開宗であったといえよう。それだけ自由自在に仏陀の精神を体し、また具現したと考えられる。インドでも支那でも発見できなかった仏陀所信の大系が、日本の仏教天才の出現によって各宗各派が完成したことは、たしかに世紀の偉業であった。しかし時代の趨勢と、その時代性に立脚し即応して開宗されたそれらの宗派が、それそのままで今日あり得るであろうか。そこに時代の即応化の問題があり、現代化の意義があると思うのである。

長い年月にわたって、培ってきた日本の仏教は、日本の心に同化したこともたしかな事実ではあるが、それだけに惰性と慣習の上にあぐらをかき続けた仏教が、戦後の混乱にかきまわされ、その対策に着手することを怠った間隙をぬって抬頭したのが新宗教であった。このことは常に考えねばならない仏教の現代化を忘れたとも云える。

組織運動は、何としても一つの集団力である。まことに危険性をはらんでいるが、統一された集結の力である。そこには自ら外観的に集団美が醸成される。実質とは別個に

この集団美の発達するところには眩惑がある。宗教的に未熟な大衆は、これに陶醉する。組織運動の筋書は常にここにあるのではあるまいか。原始僧団における戒律と威儀の問題について、私はこれと同様な意義を感じるのである。

私はこうした点からはるか彼方から日本仏教を眺め直したとき、何となく一つの焦点のぼやけに似たものを感じる。いいかえれば日本仏教の国際的意義というものは、各宗各派に関係がないということである。とくにインド仏蹟を巡拝して各宗各派が、各個ばらばらな服装なり読経をして日本の仏教徒なりと公言するなど、むしろ笑止の沙汰だとさえ思えたのであった。

各宗各派である前に、日本仏教徒でなければならぬという大綱が忘れられている現状を吟味することも、現代というものの中で考え直すべき問題ではないだろうか。

同じ仏陀を信じ、同じ仏陀を礼拝する日本仏教徒の国際的態度の基本的な確立が、まさに要請されていると考えるのである。タイにおける同型僧服の一角が、運河の船中といわず、歩道並木の蔭といわず、街の雑踏の中といわず目に映える光景は、羨しい偉観であり、庄観でさえあったこ

とを思い起す。

日本の現代社会の現状は、それぞれ組織の力で動いている。数と量とで決している。個の存在はいかに尊く、すぐれていても、態勢を決する力ではない。多数の組織によって解消している。

最大多数という民主主義のルールは、現代においては必ずしも最大幸福ではない。個の意義が高まり、個の存在価値が真価を発しないかぎり、現代の多数組織はまことに危険である。この中に処し、この中に伍するかぎり日本仏教徒の最大多数の組織化が、急を要するであろう。各宗各派がそれぞれに孤立し、まして宗派内の宗勢や、教義の対立など論外のさたであるかもしれない。

日本仏教がまず一日も早く、一大組織化による集團美を整えることによって、大衆を魅了し、教化の力が浸透するであろうことを考えてみるべきである。

教化の組織体が、いかに現代における重要課題であるかは論をまたない。この組織体のよき編成こそ、仏教の現代化に重要な役割を果すであろう。この点についても拙著「現代の教化」の批判を仰ぎたい。

四

教化の方策は、まさに出直さねばならない時を迎えている。一般大衆への対策はもとより、寺壇関係における教化策こそ緊急である。仏教の現代化が要請される課題として、この対策こそ生命線であろう。

私はこのことに関し、現代教化の問題点として、拙著「現代の教化」の中に、次の項目別に所信を述べたのである。

- 1、寺壇の人間関係
- 2、白紙からの出直し
- 3、用語の研究
- 4、時事問題との関係
- 5、教化としての儀式
- 6、職場教化の問題
- 7、団地と農村の対策
- 8、科学の仏教
- 9、生活動脈としての教化
- 10、布施徹底の教化

11、教化の家庭進出

12、マスコミと文書伝達

決してこれだけの項目にとどまるものでもなく、またこれだけの問題点について私なりのすべての解決でもない。

恐らくいつの場合も時代とともに少くとも永遠の課題であろうと考える。

ともかく仏教とは、生きることであるかぎり、生活と遊離した教化はない。という極めて当然のことに改めて着眼して出発し直さねばならない。とくに激動から変革時代に突入してしまった現代において、その人心の変調を正常化することに、仏教教化の本領を示し得ないとすれば仏教の存在意義はない。モラルの低下であるとか、道徳意識が欠如したとか、マナーを失ったとか、現代における社会問題を通じて、いかに仏教の教化が薄弱であったかを、謙虚に反省すべきである。

自由という名のもとに、常識すら無視し、秩序を乱してまで自己の本能を駆使した。社会における個の狂乱ですらあった、社会連帯の個への自覚はなかった。その連帯性を無視し得手勝手な思考や、行動を、自由の名のもとに濫用

し、またそれを許容しつつけた現代の社会性に向って、その肅正と教導に仏教の現代教化としての大きな課題である。

不安時代とともに、人間論の抬頭をみたことも、それだけ仏教の現代教化が空白であったことの証左でさえある。まさに現代社会の荒野に向って、燎原の火の如く教化の進出をみるべき現代である。

とくに視聽過剰といわれる情報化社会における仏教の課題は、それらにたちおかれているだけに新分野として周到な対策を必要とするであろう。

五

ことごとくにふれてきたように、教化の活動が、その時代人と遊離することなく定着し、即応して行われるためには、その時代思想と無関心ではあり得ない。仏教を大上段にふりあげてみても、身構える相手が眼前にいないれば試合にはならないように、教役者と大衆とが何らかのポイントにおいて結ばれないかぎり、教化の場はなりたたないものである。仏教と大衆との断層を能うかぎり近づけることへ

の努力と、創意が教化にとって欠かせない課題である。

仏教が混乱、激動、変革、そして転換期へと移行した現代に生きるかぎり、これらの原点と真剣にとりくむべきである。そのために仏陀が当時の乱立する思想界に、また諸学派抬頭の時期に、いかなる教化伝道の態度をとられたであろうか。

正統バラモンの潮流、俗信的潮流、ウベニシヤキットを根底とする哲学的潮流や、これらに反した非ベーダ的潮流に大別した当時の思想界の一般は、原始仏教思想論によるところであるが、この場合特に関心をもって考えられることは、いわゆる六師外道の進出である。当時の思想界としては、革新的潮流に乗じて起った六師の諸流は、ある意味において現代の時代的潮流に対比して考えられるからである。

このように仏陀時代のインドは、民族発展の上から、政治的關係からみても、また一般教学の上からしても、文明史上一時期を画すべき時代にあったという。沙門バラ門、六師諸派の続出など、極端に偏した異見異論派が百出し、粉糾混乱を極めた当時の思想界に対し、仏陀が仏教的独創

的特色をいかに發揮したのであろうか。

伝統的な思想からも、新思想からも、その粹をぬいて、以って時代精神に策応しながら、これを正當に導かんとした。而もその抜萃的総合も單なる寄せ集めのそれではなく、彼等を止揚しての統合であった。これを極めて大まかにヘーゲル流にいい得るならば、形式的から門教を正とすれば、六師諸派は反で、この正反を止揚し総合せんとしたものは即ち仏陀の態度でいったといい得る。と原始仏教思想論は述べている。

このように仏陀の態度は、あるいは思想的に、教理的に、微溫的でその厳しさを欠くくらいは免れないであろう。しかし仏陀の教説の目的は、科学的、哲学的学問ではなく、あくまでも衆生救済のための宗教であった点を見逃してはならない。

したがって仏陀の化導は、隨機開導であり、応病与薬の教化的技能に終始したのであった。応病とはその病源を知り、その過程を知り、良法を講じて与薬の対策をたてて行うことであつた。

仏陀の人生觀も、世界觀もすべてこのように隨機、応病

によって説かれた、いわば解剖であり、生理であり、病理であつた点を思い起すべきである。ややもすれば学としての仏教に偏し、救済としての本領を失つた現状を、現代に即してとりもどすべきであろう。

現代の教化は、この事実にな新しく立脚し直すべきである。如実知見という仏陀の基本法は、この意味においてまさしく現代への凝視から出発することではなければならない。

ありのままの考察から、あらねばならぬ考察としての仏陀の如実知見観は、現代に向つて厳しくなされねばならない現代仏教の、根本使命であらう。

一切世間において如実に一切世間を観察し、一切世間の執着を離れて、一切世間に不着なり。

という仏陀の基本理念に照して、私は現代仏教の教化の原点を消化すべきであると考えている。

仏陀がとらえた教化伝道の跡をかえりみて、現代われわれが是非着眼しなければならぬ問題は、仏陀が心がけられた説法用語についてである。梵語は当時におけるバラ門、学者間の用語であるのに対し、仏陀は当時の沙門間に

用いられたという混合的俗語に主力を注がれたという点である。

情報化時代に即して、一部識者間の梵語よりも、主として混合的俗語を説法用語とせられたという仏陀の意図と、その実践的過程こそまさしく現代の規範ではあるまいか。

難解な仏教術語の穀にこもり、消化もできず、これだけ自由な言論界と情報界の片隅に、枯死させ腐蝕させつつある現代をかえりみ、仏教術語に対する自由な研鑽と、その表現についての努力と工夫と創意を、惜しみなく行わねばならぬということである。

衆生救済を眼目とした、仏陀の宗教としての仏教が、隨機開導を怠り、応病与薬を果さずして、どうして現代の教化が成立するであらうか。

しかし教化に対する我団引水と、そのあまさを除去しないかぎりこれからの仏教進出はありえない。回心には一つの転機がある、しかし教化にはそうした飛躍があつてはならない。対機といい、隨機といい、応病という仏陀の説法形体からしても、教化者の独りよがりな結論への飛躍は余程冷静に考えねばならない。

仏教書をふと手にしているというだけの大衆に、わが意を得たりと思って飛びつくようでは、大衆はその毒氣に當って逃避するのが現代が育てあげた人間像であることを、熟知し警戒しなければならぬ。

戦後という、あるいは戦中、戦前を通じて、そうした大きな時代の断層に遮断された人びとと、仏教との交流をあまり見誤ってはならない。少くとも戦後三十年の断層の累積は、目にも物を見せなければ納得のできない人間をつくりあげてきたのである。

この間、人間は生きてきたのではなく、常にあらゆる条件と環境のもとに、ひたすら造られてきたことを計算してかからねばならないのである。現代の転換期は、同時にわれわれ仏教教化の転換期でもある。

仏陀の戒めた、“放逸”は、まさに現代、自由と平等を限界のない円に画いてしまった。自由独立性を主張しながら、社会的自律や連帯性の帰調に何ら関心をよせなくなってしまったのである。仏陀の主張せられた、“少欲知足”はまさに現代への教示であったと考えられる。このようにして人間の孤立化は、善悪の両端に向けて大きく発達し

た。

仏教書を読んでみて、学者の書いたものは教義の解釈であり、心をとらえるところまでわからずむづかしい。布教家の書いたものは、わかり易いが独りよがりで、頭ごなしの説教調であり、人間離れしている。と評した青年の読後感に、考えさせられるものがある。

ともかく転換期の現代、仏陀がとられた隨機開導を基調として教化の実をあげねばならない。

現代のわが身辺をみ廻して感じることは、何としても物から物に流動しすぎ、消費の善法とその王国の中で、経済成長によって物質文化中心となり、精神文化の高揚を忘れたことである。したがって人間としての愛の心を忘れ、獣類の本能の営みに走った。社会の傾向は人間らしい純情な、崇高にして深さがみられなくなった。

過疎過密のアンバランスから、人口激増問題とともに、多くの社会問題をふくめて危機感におそわれ、そしてついに終末時代にまで発展した。

文明の進歩につれ、はなやかな文化生活につれ、人間であることへの自覚を喪失したことは、多くの副作用とともに

に認めねばならないであろう。不安と、不信と、危機に頭打ちした人びとは、何らかの態で従前からの志向を改めねばならなくなつたのが、転換期を迎えたと思うのである。

しかしまた一面、時代という大きな波のうねりに、自らの指標や、方向や、目的までも流してしまった。それをと戻すことの理論や説明は知りすぎる程知っているのも現代人の特質である。智者が多く、もの知りが多すぎる現代人に、いかにして教化の対策をたてるべきかについては、余程考慮しなければならないのである。

マスコミの波にのつた洪水的な出版物の中で、仏教書は末曾有に店頭に並んだものの、どうして大衆の手にはいらなかつたのであろう。しかも各宗各派がてがけている月刊ものをはじめ各種の出版物は決して少くない。それでいて成果のあがらない原因を、もっと広い視野に立って検討しなければならぬ。

最も力点をおき、その必要性を認め、相当な予算を投入しながら、とにかく出版しているというのが、現代の文書伝道である。フト店頭で手にする宣伝ビラ一枚が、いかに人目をひくことであらう。その印刷や編集の技術と、文書

伝道と決して無縁であつてはならないと思うのである。

折角創意工夫をして発行した寺報や、行事案内のプリントにしても、どうして檀信徒の仏壇の引きだしにおさめてしまふのであろうか。時代センスとともに編集され、むしろ氾濫している活字の中で、一行を読ませることの対策が、もっともたちおくれている文書伝道の分野なのである。

先師先徳は、書をよくし、絵をよくし、また彫刻をよくした。それそのままが当時における偉大な伝道であり、後世への遺産として現代幾多の人心を吸収している。せめて活字の配列においても、時代感覚におくれることなく新分野の開拓に専念することが、文書伝道の現代化ではなからうか。

仏陀の基本姿勢であつた、隨機開導、応病与藥、ないしは対機説法、の原理を再び掲げ、その真意を解し、その方策を考え、その実践を期することにおいて、仏教現代化の稿を結ぶ。

(浄土宗開宗八百年事務局長
超善寺住職)